

「神国日本の復興」

——二二世紀における神道の動向——

ジョン・グリーン

はじめに

「国家神道」の時代がとつくに終わり、終戦後の「神道指令」から六〇年以上も経って、新世紀に入っている現在の神道は、どのように理解されるべきだろうか。神道は、新世紀にどう対応し、自らの過去をどう見ているか、これらの現代的な問題を明らかにしていくことが本稿の課題である。この課題に迫るには、神道の本場でもある神社本庁に焦点を絞る必要が当然ある。神社本庁は、戦後間もなく出来た「包括宗教法人」で、全国ほとんどの神社を管轄し、その神職の任免権を有する強力な中央集権的組織である。「祭祀」をさだめ、「神学」を担当し、つまり戦後の神道そのものを形作ってきたのも、

この神社本庁である。では、どのような方法をもって神道の本質に接近すればよいのか。もちろん神社本庁刊行の週刊紙『神社新報』、『月刊若木』、その他神社本庁刊行のテキストに頼る必要があるが、ここでは、そうした文献を利用しながらも主として「もの」という方法論を利用する。

宗教を考える上で「もの」は極めて示唆的な手法である。「もの」こそ人間と聖なる世界との媒介になるからでもあるが、「もの」は同時に聖なる空間を構成し、儀礼的行為を意味付ける。神道における「もの」は、例えば本殿の奥深い、目に見えないところにある「ご神体」、神々へ供えられる「神饌」、または神社の境内を形作り、意味付ける鳥居、本殿や拝殿などの建築物、あるいは神像、神木、杜も挙げられよう。しかし神社本庁は、われわれの目をこれらでなく、別の「もの」に向けさせる。それは「神宮大麻^{じんぐうたいま}」である。ここでいう「神宮」は、もちろん伊勢神宮のことで、「大麻」とはお札をさして言っている^①。伊勢神宮のお札である「神宮大麻」というもののこそ、二二世紀の神道を理解するカギと思われる。それは、神社本庁が「神道教化のパロメーター」とも称している「一千万家庭神宮大麻奉斎運動」を現に展開しているからである^②。全国の世帯の五分の一にまで神宮大

麻を頒布する目的を持つこの運動は、一九八七年から始まったが、二〇〇五年に新しい段階に入った。「モデル支部制度」の導入がそれで、「モデル支部制度」は、都道府県の神社庁が抱える「支部」のいくつかを特定し、その「支部」の神職に神宮大麻の頒布に一層の努力をほらい、工夫をこらすよう励まし、頒布向上、活性化をはかる制度である。頒布の統計から判断をして、この制度が成功を修め、戦時中以来の一千万体の神宮大麻は、もう一押しで達成されるようである。二〇〇八年全国に頒布された神宮大麻の体数は八九万五六〇五体となっている。⁴⁾

本稿では三節を立て次の課題を考察していくことにする。まず、大麻頒布の「なぜ」。なぜに神社本庁が骨身を削ってまでの努力を大麻頒布運動に入れているのか、そしてその運動が二一世紀の神道の本質について何を物語ってくれるのかを考える。次に、「もの」としての神宮大麻に目を向け、その生産、その性質そしてその頒布の戦略を考察する。大麻の頒布体制は、完璧なものではなく、様々な問題を抱えている。神職の反感をかつている節もある。そこで最後に葛藤の場としての神宮大麻頒布に光を当てる。

一 「神国日本の復興」と神宮大麻頒布

なぜ神社本庁が都道府県の神社庁、全国の神職、神社の総代を動員してまで神宮大麻の頒布に全力を尽くしているのか。それについて大きなヒントを与えてくれるのは、黒岩昭彦氏だろう。元神社本庁本宗奉賛課長の黒岩氏は、『神社新報』の紙面で神宮大麻頒布の意味合いおよびその必要性について次の三点を主張した。①「つながり」、②「原点回帰」、③「荘厳さを残す」。「つながり」は、神宮大麻の、家庭における奉斎が全国家庭を伊勢神宮につなげる結果となり、「つながり」が出来て、より多くの人々が、家庭が、伊勢参りをし、天照大神に対する信仰が深まる、との意味。氏は「原点回帰」論で「慎みの心や人間の力を超越したものへの畏怖や畏敬の念が国民の意識から急激に失われつつある」と指摘する。その失われつつある表れは、「靖国神社や歴史認識の問題」に見えるが、その回帰すべき原点は、ほかでもない「天皇と神宮という一つの御存在」である。そうした原点に回帰する装置としては、神宮大麻の家庭における奉斎が欠かせないと主張する。「荘厳さ」となると、経済論が出てくる。伊勢神宮の荘厳さと神聖さを残すために

は、経済力が必要で、「神宮大麻の初穂料」がその負担の一部を支えているという。ちなみに、大麻は「頒布」と言うが、実際には神社庁、神社が売るもので、その代金を「初穂料」と称する。匿名を条件に面談に応じてくれた内宮の関係者によると、伊勢神宮の一年の収益の半分以上が大麻の初穂料で賄われている、という。

黒岩氏は、上述の論旨を次の様に締めくくる。

天皇と神宮という二つの御存在が真姿に保たれる限りにおいて神国日本の復興はいつしか図られるだろう、という確信を今後とも抱いていくためにも、我々は必死でなければならぬ。⁶

かいつまんで言えば、「我が内なる「国体意識」と言われる天皇と神宮こそ国民が回帰すべき原点で、神宮大麻の頒布、および国民の家庭における神宮大麻の奉斎が、神国日本の復興を実現可能にする、という議論であろう。黒岩氏のいう「神国日本」に何ら具体性はないが、基本的に万世一系の神話、祭政一致的な天皇を中軸とする一つの国家像であろう。このような神国日本の復興は突然現れた課題ではなく、神社本庁の設立以降一貫して追求されてきた主な目標であることをまず確認しておこう。

このことは、神社本庁が制定し、全国の神社神職をして執り行わしめる祭祀によって端的に示されている。本

庁管轄下の神社の祭祀は、年一度の例祭の他に春の祈年祭と秋の新嘗祭（大祭）、歳旦祭、元始祭、紀元祭、神嘗祭当日祭、昭和祭、明治祭、天長祭（中祭）がある。

さらに「恒例式」という範疇の祭祀もあつて、中でも春季、秋季の皇霊祭遥拝が二〇〇六年に新たに加えられた。いずれの祭祀も、万世一系という民族神話を物語るものである。例えば、祈年祭、新嘗祭、神嘗祭において皇祖天照大神を祭り、紀元祭や神武天皇祭において皇祖の子孫なる瓊瓊杵（きき）および神武による、万世一系の始まりを記念する。そして連綿と続いてきた万世一系そのものを春と秋の皇霊祭遥拝において証する。これらの祭祀に戦前と取れる。「国家神道」時代との歴然とした連続性が見場だろう。日本国憲法第二〇条において政教分離が設けられたことにより、国家の伊勢神宮やその他の神社との関係が禁止されているからである。しかし、国家と伊勢神宮との間の距離が戦後大いに縮まっている。これは黒岩氏のいう「神国日本の復興」と無関係でないので若干の考察をくわえる。

一九六〇年一〇月の第三六臨時国会で浜地文平議員は、神社本庁の立場を代表して「伊勢の神宮に奉祀されている御鏡の取扱いに関する質問趣意書」を政府に提出した。

池田勇人首相がそれに対してしたためた答弁書では「神鏡」について次の様な理解を示した。「神鏡」は「天皇が伊勢神宮に授けられたのではなく、奉祀せしめられたのである。この関係は歴代を経て現代に及ぶ。したがって(中略)伊勢の神鏡も皇位とともにつたわるべきものと解すべきである」。伊勢内宮で現に祭られている神鏡は、まさに天照大神が天皇の祖先に直に授けた、という解釈である。神社本庁は、この発言を「伊勢の神鏡は皇祖伝授の御鏡であり、日本国天皇の皇位とともにつたわるべきものであるとの国体法を確認した」と理解した。更に、政府のこうした「公権解釈は、その終戦以来の一般憲法学説を排して、皇位と神宮との特殊不可分の関係を公認した。それは(中略)敗戦以来曖昧にされつつあった我が日本国体は、恢弘に輝かしい一步を印するものであった」との見解も示した。いづれにせよ、池田の「答弁書」によって一種の公的性格が伊勢神宮に新たに付与されたとも言える。しかも池田以降の内閣がこうした理解を撤回しないばかりか、目立つのは、代々の総理による伊勢神宮への接近だろう。総理の年頭の伊勢参拝がそれである。一九七〇年代以降、キリスト教徒の大平正芳氏や社会党の村山富市氏、民主党の鳩山由紀夫氏も含める歴代首相は、新年に決め事のように伊勢神宮に足を運ぶ。

これは総理、内閣による靖国参拝と違ってほとんど問題視されてこなかった。神国日本の復興に欠かせない国家と伊勢との関係は、池田答弁書やそれをうけた総理、内閣の参拝によってもある程度立ち直ったことが理解できよう。

ここで最後に神社本庁における伊勢神宮の位置づけを再確認したい。神社本庁が戦後定めた社格制度は、戦前の官幣大社などを「別表神社」の枠に入れるなどして戦前のそれを踏襲する。そして伊勢神宮を、すべての神社の上に位置づける。『神社本庁憲章』の第二条に「神社本庁は神宮を本宗と仰ぎ、奉賛の誠を捧げる」とあるように、神社本庁は、神宮を「最高至貴」の神社とみなす。神社本庁が直接頒布に係るお札は、もちろん伊勢神宮の神宮大麻のみであるという事実もそのことを裏付ける。もう一つは、神宮の「祭主」、「大宮司」の任免権は、神社本庁でなく天皇が握ることが挙げられよう。他の全国の神社神職は、神社本庁の統理がその任免権を握るが、「祭主」も「大宮司」も統理でなく、「勅旨を奉じて」決定する。いうまでもないが、本庁が神宮を「本宗」と仰ぎ、神宮大麻を頒布し、祭主などの任免権を天皇に握らせるのは、伊勢神宮だけが神国日本、万世一系の神話を意味付けるからにほかならない。

二 「もの」なる神宮大麻―その奉製と頒布

さて、神社本庁の奨励の元で頒布される神宮大麻そのものに焦点を絞ってみる。神宮のお札は、近代国家の産物では決していない。近世期の御師が全国至る所に神宮大麻の前身である「お祓」を普及させ、庶民と伊勢神宮の繋がりをもたらすその効果は、極めて大きかった。近世期は「お祓い」とも言われていたようにその厄除効果が訴えられていたが、近代になってその名称が「神宮大麻」に定着すると同時に、その解釈もかわった。明治以降の大麻頒布は皇祖天照大神の信仰を全国に普及させることが期待されていた。大麻の解釈は、二通りの説が生まれた。一方は「御璽説」といい、他方は「神籬説」という。前者は、神宮大麻が天照大神およびその「神徳」を「象徴」し、後者は天照大神が実際に神宮大麻を依代にして乗り移っていることを意味する。この二説をめぐる議論は、二一世紀になっても続けられ、二〇〇三年の神社本庁教学研究大会でも行われた。結論からいうと、前者の御璽説が支配的となったが、それは、参加者の土岐淳氏と藤本頼生氏が考察したように「戦前同様に神社は、一宗教にあらずといった意識が強く働いた」結

表1 神宮大麻奉製行事

月日	行事	場
1月8日	「大麻暦奉製始祭」	
4月中旬	「大麻用材伐始祭」	丸山祭場 (宇治橋)
4月下旬より	奉製	奉製所 (神宮司庁頒布部)
毎週一回	「大麻修祓式」 ・禰宜、前夜から齋館に参籠潔斎 ・禰宜、神饌を供し、神酒を奠す ・禰宜、祝詞を奏す ・所員、八度拍手 ・禰宜、祓を修し、大麻を祓清む	奉安所 (奉製所内)
9月17日	「神宮大麻暦頒布始祭」 大麻が大宮司より統理に授与される	内宮神楽殿
10月2日	「神宮大麻暦頒布始報告祭」	都道府県神社庁
12月20日	「大麻暦奉製終了祭」	
2月下旬	「神宮大麻暦頒布終了報告祭」	都道府県神社庁
3月1日	「神宮大麻暦頒布終了祭」	内宮神楽殿

出典 『神宮大麻・暦についてのQ&A』 神社本庁1998年、56-63頁より作成。

果でもあったようで、御璽説が必ずしも神社本庁の本音ではないようだ。神宮大麻の本質にさらなる光を当てるためには、神宮大麻の奉製から頒布までの一連の行事を見てみよう。

表1は、神宮大麻に係る一連の行事を示すものであるが、特に注目に値するのは、毎年四月中旬より週一回行われる「大麻修祓式」だろう。前夜から斎館に参籠潔斎した禰宜が大麻を前に神饌をまぜ供し、神酒を奠す、そして祝詞を奏す。祝詞は、「このおおぬさに、みいつのみたまをさきはへたまひて云々」とある。つまり、天照大神の御霊が大麻に乗り移るようという意味の御祈りである。ちなみに天照大神が乗り移るとされるのは、大麻の「御真」である。御真は杉の細長い「木切れ」で、



図1 剣祓(けんばらい)は左

大麻のあらゆる種類に共通する、もつとも肝心な部分である。図1は、「剣祓(けんばらい)」と称せられる神宮大麻で、紙に挿入した御真がこれではっきり見える。他の大麻の場合は、この御真を長方形の木の板に貼り、そして、その全体を「天照大神」と書いた紙で包む形になる。いずれにせよ、いくら「御璽説」が支配的といっても、天照大神の御霊が神宮大麻に実際乗り移っていると理解されているようである。

神宮大麻頒布の究極的な目的地は、家庭の神棚だが、次に神社本庁が定めた家庭における神宮大麻の祭り方を見てみよう。神社本庁編『神宮大麻暦』についてのQ&Aによると、まず「家族揃って清々しい心で新年を迎えし「氏神さま」と共に「お伊勢さま」をお参りし、今年一年の無事をお祈りしましょう」とある。神宮大麻は、家庭の拝み、お参りする対象になるが、それは新年のみでなく毎日祭るべきとされる。

毎朝、お米、お塩、お水などをお供えして拝礼します。お神酒、季節の初物、お土産等はその都度お供えし、感謝を込めて後ほど頂戴します。

そしてお参りの作法は、「神社の参拝作法と同様に、二拝(深くお辞儀を二回)二拍手(手を二回たたく)一拝(深くお辞儀を一回です)」と定める。また、例えば、一緒に生活

している人が亡くなった場合に、神棚まつりを慎み、五〇日祭後、神職に「清祓」をしてもらってはじめてそれを再開する様に指示される。これなどからも、神宮大麻の聖なる本質―それがただのシンボルでなく、文化人類学的に言うところの *numinous object* として扱われていること¹⁵⁾が確認されよう。

さて、この神宮大麻がどのようにして伊勢神宮から、おまつりする家庭までたどり着くのか、神宮大麻頒布の力学は何かを、京都府を事例に検討しよう。先ず、上述の表1でも確認できる様に、奉製されている神宮大麻は、伊勢の神楽殿で行われる「神宮大麻暦頒布始祭」(九月)によって大宮司から神社本庁の統理に授与され、次にその場で統理の手からそれぞれの神社庁長へと手渡される。そして一〇月の「神宮大麻暦頒布始報告祭」では、京都府などの神社庁で神宮大麻を神社神職に頒つ、という経路となる。

京都府神社庁は、一五七九社の神社を管轄しているが、その神社は市内の六支部の他に、山城、丹波、丹後それぞれ支部にも区分けされている。こうしたネットワークを利用した京都府神社庁の頒布の統計を見ると、平成一七年は一〇万九四四体だったのが、平成一八年に一〇万三〇二二体増加し、一九年も増えて一〇万四八三九



本日、お宮さんから受けられた「天照大神宮」の御神札は「お伊勢さんのおふだで、神宮大麻」といいます。
「お伊勢さん」の神様は、太陽のまじりすべのものとのお恵みを与えて下さいます。
この神宮大麻をお受けになつた神社のおふだと一緒にござります。 (お宮)

図2 お日様

体となり、そして二〇〇八年は更に一〇万五一五九体と伸びている。¹⁶⁾こうした伸びのうらには、神職、総代の骨身を削ってまでの努力がもちろんある。他の都道府県に見習い、例えば簡易神棚を無償で配布している。神棚がないから神宮大麻を断る家庭が多いことへの対応である。さらに、京都府の各神社で神社のお札を参拝者に授与する際、神宮大麻とセットで売るキャンペーンを行っている。京都府ではさらに神宮大麻を購入する家庭に、別に住まう子、孫の分も買うように勧め、それは「おやつや日用品などとともに送って家族の絆を保つ」効果を持つという宣伝もしている。

京都府独自の戦略もある。神社庁が「おがたまの木絵画コンクール」を企画し、そして入選品の中から「お日様の絵」を選んで頒布運動に活用している。図2に見えるその絵は、「温かく、明るく、優しい」天照大神の御神徳を表現するから選ばれたわけで、京都府の神宮大麻関係の宣伝には、必ずこの魅力的で、なじみやすいマー

クを付けている。¹⁷図2は、神宮大麻を購入する氏子に渡す解説の一枚の紙だが、その説明文自体も興味深い。ここでは、天照大神は、「太陽の様にすべてのものにお恵みを与えてくださいます」神として描かれ、さらに、神宮大麻をおまつりすることを、「家族の心があらたまり、それが和やかにそして気持ちがいよいよ癒されます」との説明である。つまり、天照大神を万世一系の神話、神国日本の復興と一切結びつけないことが注目される。京都府神社庁小冊子『だいじえすと杜』などでも、この姿勢を基本的に通している。「天照大神は、生き生きとした力をすべての神様に与える最も尊い神様」で、氏子も「天照大神の御神徳を受けることによっていつそうその力を発揮されるのです」というが、天照大神は、政治権力と結びつかない実には「やさしい」、共同体のための神という位置づけがなされている。¹⁸京都府における神宮大麻頒布の成功がどこまでこうした天照皇大神像につながっているか分りかねるが、戦前の万世一系的な、権力の源としての皇祖よりはやさしい天照皇大神の方が二一世紀の人々を魅せるものがある。¹⁹

三 抵抗の色々

都道府県の神社庁は、モデル支部制度をもとに様々な戦略をもって、工夫を凝らし、神宮大麻を「一千万世帯」を目標に頒布している。神社本庁は「一一年連続の減体傾向に歯止めをかけた」というふうには「モデル支部制」が成功をおさめていると、評価している。²⁰だが、樂觀的どころか深刻な危機感に覆われている。本庁が行った意識調査は、その一因だろう。二〇〇七年の「神社に関する意識調査」では、神宮大麻を「あなたの家庭で受けていますか」に対して、「受けていない」もしくは「わからない」が全体の八パーセントになっている。²¹二〇〇五年の「伊勢神宮」に関する意識調査」では、神宮大麻の問題がさらに浮き彫りにされた。そこでたとえば二〇代の日本人で、「神宮大麻を受けていない」か「わからない」が合わせて九四パーセントにもなっている。若者を対象にした頒布活動がぶつかる問題のひとつは、「大麻」という名称らしい。富山県の一神職によると、「そんな大麻があったがですか、香港大麻とどっちが効き目がありますか」と若者に言われるそうだが、これは富山だけの問題でない。²²二〇〇九年五月に開かれ

た神社本庁の定例評議会でも、この大麻問題が取り上げられた。神道教化の妨げにならないよう、政府に「大麻取締法をマリファナ取締法とかに変えてほしい」という提言があつたぐらいである。なお、年齢が上がるにつれ、神宮大麻を受ける割合が増加するといえ、六〇代になつても「受けている」は、二四パーセントにとどまっている。受けない理由は、「もともとまつていない」や「必要ないから」が最も多い。年配の方が「宗教に戻る」、「神社に戻る」とよく言われるが、この層の、神宮大麻に対する信奉は、その限りではないようだ。

神社本庁の危機感を煽る今ひとつの理由は、自ら公表している頒布統計の信憑性がある。二〇〇八年に八九九万五六〇五体もの神宮大麻が都道府県の神社庁から地域の神社に確かに輸送されたが、家庭でまつられている大麻数を反影した数字ではないらしい。筆者は、某県の有名神社の禰宜を務めながら、同県神社庁の役員でもある一神職に面談にに応じてもらったが、問題の一端がこの神職の言葉に現れている。

筆者：神社本庁は、もう一押しで頒布目標の千万体を達成するようで、すごい頒布率だと思えますが、いかがでしょうか。

禰宜：本庁の出す統計は信頼できません。言つては

いけないことでしょうが、皆抱えています。筆者：それは要するに神職達が神社で頒布しきれない分を神社庁に返さないで抱えているという意味ですか。

禰宜：そう、そう。返すのが恥ずかしいからね。都市ならいいです、田舎もいいです、回覧板と一緒に回ってくるから。うちみたいな「田舎の町」の神社が一番こまる。とにかくあの数字は信頼してはいけない、皆水増ししてある。都道府県によつて水増しの度合いが違うでしょうけど、神職は皆大麻を抱えています。

某県神社庁務めのこの神職は、「いずれにせよ今の時代は、大麻をもらうのと、信仰を持つのと、結びつかない時代なので、大麻をもつて伊勢の信仰を広めるのはどうかな、と思う」とも言った様に、頒布運動そのものの価値も疑っている。運動の意味を疑つて、与えられた役を果たさない神職の存在は、神社本庁の危機感をあおる更なる一因になっている。第一節で紹介した黒岩氏の論考も実は抵抗する神職をその射程に入れたものである。黒岩氏は、冒頭でこう指摘した。

また近年多く聞かれるのは神宮大麻を頒布する意義が解らない神職が増えつつあるという点である。こ

の点は重大である。「解らない」と述べる神職の心境を斟酌すれば、「自分の奉祀する神社のことでさえ大変なのに、どうして他の神社のことまでせねばならないのか」という疑問だろう。個々の神社における厳しい現状は理解するが、こと神宮大麻に関し
て言えば損得を超越した、献身的な奉祀の精神こそ
が問われているのではないか。⁽²⁵⁾

抵抗の一集団と見なされるのは、神明社の神職らしい全国的に一九六三社もある神明社は、天照大神を祭る神社で、氏子、参拝者などに授与するお札は、もちろん天照大神のそれである。なぜに改めて神宮大麻を頒布しないとだめなのか、という議論が神職からも氏子からも当然現れる。神社本庁主催の「神宮大麻に関する研究会」(二〇〇四年)における藤本頼夫氏の発表は、神明社のこうした問題を対象にしたものである。藤本氏は、本庁刊行物の『神宮大麻頒布必携』や『神宮大麻Q&A』の台詞を借りて次のように応答する。まず「いずれが本、いずれが末でしようか」と前置きをして「ご祭神が同じであつてもいわゆる本社となる神宮の神札を受けることがまずは肝要で」、「国民の総氏神として崇敬される神宮の神札を受けることが大事」だと主張する。これは、説得性のある議論よりはただの「主張」に終わっているよう

にさえ見える。⁽²⁶⁾

神社本庁の神宮大麻頒布運動にたいする抵抗は、どれだけ執拗か知るすべはない。それは神社本庁が神職を対象にした意識調査を行わないからである。筆者は某県のある八幡神社の神職から次の様に言われたが、例外的なのか、典型的なのかは残念ながら言い切れない。

神宮大麻や遷宮への寄付など、今は各神社・宮司の不満がたまっている。本庁包括下の神社では、神宮大麻の割り当てられた数を頒布できず、自社で抱えて破棄するケースも多いです。ちなみに、うちの支部は「神宮大麻モデル支部」になったとかで、三年間一社あたりの頒布数を強制的に増やされ、支部長自らも接待に飛び回っていました。(中略) 神社関係の会議や集まりに行くと、大半の神職の意識が役人や官僚や政治家と大差ないのがウンザリです。

この神職が言い表す恨みは、イデオロギー的な理由もあるが、経済的なそれが強い。そしてそのうらに長く続いている地域神社と本庁の緊張感も見取れる。神職は、伊勢神宮に関心が湧かない、むしろ自分の神社、自分の共同体が生き甲斐である。さらに、神宮大麻が経済的な負担になっている。それは、恥ずかしさ故に、売り切れない分を神社庁に返却しないで、抱えてしまうからであ

る。実は、この神職は以前から神社本庁に対して不満をもっているようで、神宮大麻頒布運動そのものが原因でない。神社本庁は、神社からその神職の数、位に比例して「負担金」を募り、本庁官僚の年収などをその負担金で賄う。しかし、本庁は、この八幡神社のように困窮している神社への財政の再分付は、行わない。神職は、「神社のための本庁ではなく、本庁のための神社、というのが宮司会議等での複数名の意見で、私も同感ですがね」という意見をのべる。いずれにせよ、神社本庁が神職の神宮大麻頒布運動に対する抵抗を認識していることは、充分に明らかで、そしてその認識が危機感に繋がっているのである。

おわりに

二〇〇九年四月の『月刊若木』のトップ記事は「本宗奉賛活動に更なる奮起を」と題し、「神社本庁が最重要課題として取り組んでいる本宗奉賛活動は、神宮大麻・暦の頒布、参宮促進、遷宮奉賛の三つに大別され、三本柱と称されている」と主張する。神社本庁は、頒布のおそるべき減体を「神社界の衰退に繋がる危機的な現象」だとまで言う。我々は、これで神宮大麻という「もの」

の頒布は、まさに神社本庁にとって死活問題でもあることがあらためて理解できる。神宮大麻を全国に頒布することによって「神国日本」という国家像が二一世紀に復興する、という目的を神社本庁は持つのである。それは、元神社本庁本宗奉賛課長の黒岩昭彦氏が機関紙『神社新報』に書いた通りである。そして復興は、「御籬」と理解すべき神宮大麻の、家庭におけるおまつりを欠かせない装置とするのである。神宮大麻こそ二一世紀における神道の本質を明るみにする「もの」と思われる。

神社本庁が、伊勢、皇室、万世一系の神話を中核とする「神国日本」の復興を狙うこと自体は、もちろんその自由であって、筆者はそれを批判するために筆を執ったわけではない。むしろ神道の現代史という、ほとんど研究がない課題に迫りたいと思ったのみである。しかし、神社本庁がそうした優先事項を追求するあまり、神社界だけでなく日本社会全体が損することがあるようにも思われる。先ず、後者についてだが、多くの宗教団体が数十年前から取り組んでいる社会問題に神社本庁がなかなか目を向けない。気候変動がもたらす環境問題が一事例である。神社に付き物の「杜」も気候変動の影響を受けざるを得ないため、神社本庁が先頭に立って、環境に関して発言してもおかしくないのに、最近のごくわずかな

例外を除いて沈黙を守る。自殺という深刻な社会問題、様々な人権問題、脳死臓器移植のような生命倫理問題なども、ごく最近の『神社新報』の紙上にやっと姿を表し始めてはいるが、神社本庁にとってはあくまでも副次的なものである⁽²⁸⁾。

前者の神社界となると、神社本庁は神国日本の復興を優先事項に据える結果、自らの管轄する神社およびその神職のニーズを認識し、そのニーズに充分に答えていると言いがたい。神社神道が今危機に面しているというのが、新聞記者山村明義氏の意見である。日本を横断して神職と面談をしてきた山村氏は、困窮している神社、生活に苦しんでいる神職を数多く紹介しているが、同時に自らの神社を立て直して成功している神職も数人取り上げる⁽²⁹⁾。山形の獅子口明神、茨城の鹿島神社、東京の神田神社、大阪の星田神社のように。獅子口明神宮司の二宮寛司氏は、自らの神社を脅かす、ある危機に直面した際「私には共産党しか味方がいなかった」とまで訴えた。ここには、神社本庁の姿が表れない。山村氏が取材した神社が神社本庁をどこまで必要とするかが、今ひとつ明らかでない。神社本庁の存在はしかし神社をぬきにしては意味をなさない。神道の将来は、神宮大麻の頒布率のみでなく、神社本庁と地域の神社との関係によって決定

的に左右されると思われる。

- (1) ちなみに、「たいま」という言い方は、明治四年以降定着したもので、それ以前は「おおぬさ」と言っていた。もともと大麻という名のお札はお祓いをする意味があったためおおぬさと呼ばれていた。
- (2) 神社新報社編『検証神社本庁六十年先人の足跡―『神社新報』の紙面から』(神社新報社、二〇〇八年、一五二頁)。
- (3) 一九四一年から一九四五年までという期間における平均頒布数は、一一〇〇万本だったのである(松本丘『神宮大麻頒布の歴史』『神社本庁教学研究所紀要』九、二〇〇四年、二三五頁の表を参照のこと)。
- (4) 本宗奉賛課「平成二十年度神宮大麻及び暦頒布数と前年度頒布数との比較」『月刊若木』七一九号、二〇〇九年、五頁。
- (5) 神社本庁は、はやくも一九七三年に神宮大麻をふくむお札が「商品と異なる」との理由で「売る」「買う」の用語は神社側として使用しないことを戒めている(『祭務部特集』別冊『月刊若木』二〇〇九年、一七頁)参照。
- (6) 黒岩昭彦「モデル支部制度第一期終了を前に改めて頒布を考える」『神社新報』二〇〇八年六月二六日。
- (7) これについてたとえば二〇〇九年二月九日の『神社新報』社説、「謹んで神武創業の精神を」を参照されたい。神社本庁と祭政一致については、「祭政一致のご制度」と題する社説『神社新報』一九七一年一月一八日を参照。そこで「神社は国家の宗祀にして一人一家の私すべきにあらず」という明治以降の神社のあり方を理想とする。
- (8) 神社新報編『検証神社本庁六十年先人の足跡―『神社新報』の紙面から』(神社新報社、二〇〇八年、八八頁)参照。

- (9) 神社新報社編『増補改定近代神社神道史』(一九九一年)。
 (10) 神社本庁は、これが第一歩だけであって、不十分だとの見方をする。「未だに神宮に対する天皇の祭祀やご参拝等の公的性格が明確にされたとは言いがたく、更に肝心な神宮制度改正の問題は、今に至るまでほとんど何らの進展を見せていない。すなわち、次回の式年遷宮ですら前二回と同様の「民営」方式に拠らなければならない現状がそれを端的に示している」(前掲神社新報編『検証神社本庁六十年先人の足跡―『神社新報』の紙面から』八九頁)。
 (11) 「国家の安寧祈願」で仕事始め(『産経新聞』)。総理による伊勢参宮を批判した数少ない事例としてカトリック司教団の「麻生太郎首相の伊勢神宮参拝に抗議します」がある。司教団はそこで「国家神道」復活への意図があると感じるをえません」と主張する。http://www.cbj.catholic.jp/jpn/doc/cbj/0901092.htm を参照。
 (12) 松本丘「神宮大麻頒布の歴史」(『神社本庁教学研究所紀要』九、二〇〇四年)参照。
 (13) 土岐淳、藤本頼生「神宮大麻奉斎の信仰的意義」(『神社本庁教学研究所紀要』九、二〇〇四年、二七八頁)。
 (14) 前掲「神宮大麻・暦についてのQ&A」六七―九頁。
 (15) 前掲「神宮大麻・暦についてのQ&A」七三頁。
 (16) 本宗奉賛課「平成二十年度神宮大麻及び暦頒布数と前年度頒布数との比較」(『月刊若木』七一九号、五頁)。
 (17) 『杜』一二三号、八頁。
 (18) 『だいいえす』杜「四号、三頁参照。
 (19) なお、こうした天照大神像を神社本庁が必ずしも承認しないことを付言しておく。例えば、上述の神社本庁会議では、佐野和史氏による次の発言がある。天照大神が「単なる太陽神、お日様の神様だ」というのではない、皇祖天照大御神であり、日本の国の根本になっている。(中略)御鏡

を天皇様からお預かりして祭祀をしている、いわば天皇祭祀の根幹にある御社が伊勢の神宮である(『神宮大麻の意義をめぐる諸問題―全体討議』「神社本庁教学研究所紀要」九、二〇〇四年、一五四頁)。

- (20) 『神社新報』二〇〇七年三月一二日参照。
 (21) 『第三回「神社に関する意識調査」に関する報告書」(神社本庁教学研究所、二〇〇七年、三四頁)参照。
 (22) 「神宮大麻の意義をめぐる諸問題―全体討議」(『神社本庁教学研究所紀要』九、二〇〇四年、一五六頁)。
 (23) 『朝日新聞』二〇〇九年六月六日参照。
 (24) 前掲黒岩「モデル支部制度第一期終了を前にあらためて頒布の意義を考える」。
 (25) 藤本頼生「神明社との関係」(『神社本庁教学研究所紀要』一〇号、五三―一頁)。
 (26) 『月刊若木』七一八号(二〇〇九年四月一日、一頁)。
 (27) 『神社新報』二〇〇七年三月一二日参照。
 (28) 神社本庁の社会問題とのかかわり合いに関しては、Breen, John and Mark Teeuwen, *A new history of Shinto*, Wiley Blackwell, 2010, 第六章参照。
 (29) 山村明義「今神社神道が危ない」(『諸君』四一―三、二〇〇九年)参照。

(John Breen)